

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
フィールドワーク・インターンシッププログラム 2011 年度 JASSO 派遣報告書

報告者氏名 近藤 有希子

22 年度 (入学) 編入

1. 研究課題:

紛争後ルワンダにおける「家族」の再編過程に関する研究
—農村部の孤児に着目して—

2. 派遣期間:

平成 23 年 08 月 02 日 ~ 23 年 09 月 25 日 (55 日間)

3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

報告者の滞在した K 村は 141 世帯 (人口約 630 人) の村である。今回、25 日間の住み込み調査では、そのうち 37 世帯の家族構成を把握することができた。37 世帯中 17 世帯で計 26 人の子の移動が行われていた。農村部における孤児の引き受けは、ルワンダで紛争以前から行われてきたと考えられる子の移動の文脈で行われているものと、そうでないものにわけられるのではないかというのが、今回の渡航で得られた推論である。村に存在する各世帯の構成は、一組の男女とその子という核家族の形態をもつものは 39 世帯中 18 世帯で、女性世帯主世帯が 15 世帯を占めていた。孤児のひき受け世帯に限らず、周辺世帯も含め調査を行ったことで、紛争以前の地域社会のシステムに修正を加えながら、孤児や寡婦が包摂されている一方、大規模な人の死という経験が、新たな関係性をもとにした再編過程を生んでいることも示唆された。

首都では現地 NGO や国際 NGO、また政府機関などに訪問した。そこからは、各機関がさまざまな角度から、一部、協力・協調しつつ孤児や家族に対する援助や政策を行っていることが明らかとなった。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や展望について

今回の渡航で、村においても首都においても人間関係が大きく広がったと感じている。そのため、村においては、今回の調査を世帯数や村を拡大して継続していきたいと考えている。また、特に長期で渡航することで、例えば「孤児 (*impfubyi*)」という単語ひとつにしても、それがどのように使われているのか、現地の文脈の中で捉えられるようになりたいと考えている。その際の課題としては、現地語であるニャルワンダ語を一層習得しなくてはならないという点が挙げられる。また、首都においては、政府機関や国際 NGO・ローカル NGO の職員などと面識を持つことができ、調査への協力の意向もいただいている。今後はその人脈を利用して、人の移動や自然環境など地域差あるルワンダの、できるだけ広い範囲・さまざまな角度からみた「家族」の再編について思考していきたいと考えている。

5. 本プログラムに関して意見をお聞かせください。また、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいですか?

本プログラムは、インターンシップかフィールドワークを各自が選択し、さらにフィールドワークにおいては派遣期間内で派遣者自身が自由に時間を使い、計画を組み立てることのできる点 (今回報告者は実施していないが、複数の国へ訪問できる点も特筆する) がよかった。そのおかげもあり、積極的に現地で人脈を作ることができたので、そのことは今後の調査にも大いに助けとなると考えられる。期間に関しては、報告者の今回の渡航は短期を希望していたので満足であるが、もう少し長期で派遣されるプログラムがあれば、ぜひ今後も参加したいと思う。資金面に関しては、遠方であるアフリカへの渡航には不足する部分もあったが、使い方も自由度が高く、領収書の発行の難しい地域柄、とても便利であった。

署名